

## じっきょう

地歴・公民科  
資料

No. 91

もくじ	
巻頭	日本の中世をどう教えるか 本郷和人東大史料編纂所教授に 三人の現役高校日本史教員がリモートで聞く……………1
実践	主体的・対話的で深い学び 防災教育が育む力 ～兵庫県立舞子高等学校環境防災科の取り組み～ ／榎田 順子……………6
トピックス①	いま哲学者たちはコロナ禍をどう見ているのか ／浅沼 光樹……………8
トピックス②	病者と差別・スティグマの歴史 —日本軍の精神疾患兵士を事例に ／中村 江里……………13
シリーズ「公共」③	新テストに向けて、「公共」が果たす役割 ／川瀬 雅之……………17
図書紹介	……………24

## 巻頭

## 日本の中世をどう教えるか

本郷和人東大史料編纂所教授に  
三人の現役高校日本史教員がリモートで聞く

本郷和人先生といえば、日本中世史がご専門で、一昨年出版された『東大教授がおしえるやばい日本史』（ダイヤモンド社）をはじめ、今回の議論のベースにした『乱と変の日本史』（祥伝社新書）などの旺盛な執筆活動や、テレビ出演で皆さんもご存知ではないでしょうか。

そんな先生に、コネもなく、いきなりこの催しのお誘いをメールしました。ドキドキしながら待っていると、「とても興味深い企画ですね。喜んで参加させていただきたく存じます。」とご返事がきました。話題は、まずそこから。

——本郷先生、「喜んで参加させていただきま  
す」というご返事、とても嬉しかったです。どう  
してそう思われたんですか。

**本郷**：大学の教員の中には、良心的な方でも、  
「研究はやるけど教育はやらない」という人がい  
らっしゃいます。大学の研究者と高校の先生たち

の間に深刻な乖離があるんじゃないか、現状にそ  
ういう危機感をもっています。

また、若い人たちに聞くと、「歴史は暗記だか  
らキライ」というのが普通の答えです。このまま  
では歴史学は減んでしまうんじゃないか、危ない、  
と思って今日参加しています。

## なぜ「分かりやすく」にこだわるか

——本郷先生の『乱と変の日本史』を拝読して、こんな記述にびっくりしました。「近世の武士は、中世の武士に比べてずっと賢く」「平将門の権力は、言うならば、幼稚な権力だった」といったものです。

「賢く」とか「幼稚な」とかいった表現は、確かに分かりやすいのですが、その一方、現代的なイメージをもたせるのは問題だ、当時のことは現代とは違う文脈でとらえなければいけない、という発想もあると思います。そのへんのバランスを、どうお考えですか。

**本郷**：史料編纂所の同僚に、「一両、って今のお金でいくら？」と聞いたんです。その人は良心的な方なんですけど、「あ、それは、いろいろな換算のしかたがあって、難しくて、えーと、えーと……」とおっしゃるんですね。

それに対して、「僕が聞きたいのは、ざっくりなところなのに。」と思うのです。例えば、江戸時代、「十両盗むと死刑」とか「間男七両二分」つまり不倫の慰謝料はこのへんが相場、といった言葉があります。それ、って大体いくらくらいなのか。

研究者が緻密に史料に当たることと、子どもたちに歴史を教える時に僕たちの言葉で伝えることと、その二つができて初めて教育が成り立つと思うんです。

——確かに、研究者に質問したら「そこは史料がないから分からない」とペンディングされることがありますね。

**本郷**：それで貴方はわかってくださるでしょうけど、子どもたちは諦めてくれませんか。「教えてよー！」と言ってくる。そこで教える工夫をするのが、教育なんじゃないでしょうか。

中学や高校の現場で、教えにくいことが二つある、とよく聞きます。一つは明治時代から現代までの、政党の変遷。記号としてではなく、意味のあるものとして教えるのが難しい。もう一つは莊園制ですね。こういったことを、どう分かりやすく教えたらいいいのか。

この点で、日本史の研究者の方々は、研究者として一線級でありたいと思っているんだけれども、それをどういう風に分かりやすく工夫して教えたらいいいのか、そう考えて本を書いている人がほとんどいない、そこが非常に問題だなあ、と僕は思っているんです。

## 中世を学ぶ意義

——先生のご専門の中世ですけれども、先ほど「賢くない」「幼稚」といった表現がありました。後進的で、のちの時代に上書き更新されていくイメージがあります。「現代に近いところを教えればいいのではないか」と思うこともあります。

また、室町時代のように、現代と直接つながらないように思える時代を、どう教えたらいいいのか。逆に、「つながらないから面白い」とも言えるんで、ちゃんと教えてあげたい、とも思うのですが。

**本郷**：「現代とつながらない」わけではないですね。「現代の日本人の原型ができたのが室町時代」と、よく言われます。これは、ドナルド=キーンという方が書いていることです。

室町幕府八代将軍の足利義政。この人は、政治も経済も軍事もまるでダメだけど、現代の日本人の原型をつくったのはこの人だ、とキーン先生は言っている。昭和という時代の、畳があつたり床の間があつたり、能、生け花、茶道、……そういったものは全部室町時代ですね。室町文化は、一言で言うと生活文化なんで、であるからこそ現代に伝わっているんです。

それから、「中世を学ぶ意義」それを20年も30年も考えてきたんですけど、

「**いかなる国の、いかなる時代の歴史も現代史である**」

という言葉があります。どの時代も、現代との比較を経て、そこから見えてくるものがある。

自分の顔は鏡を見て初めて「あ、オレの顔って、こんな顔してるんだなあ。」とわかる。さらに言えば、他の人の顔を見た時に、「あ、オレは女の子にモテなさそうな顔してるんだな」とか「こういう顔だと美しいんだな」ということがわかるわ

けですね。そういう意味で「比較」ということが必要になる。

例えば鎌倉時代と現代とを比べてみた時、何が違って何が同じで、では鎌倉時代の特徴は何なのか。

例えば、いまだったら、「人命が何より大切だ」と言われますけど、どうも鎌倉時代の武士は、そうは思っていない。「人命を捨てても守るべきものがある」そういう時代もある。だとしたら、逆に、現代とはどういう時代なのか。私たちはどんな人間であり、どんな特徴をもっているのか。そういったところに、前近代を学ぶ意味があるんじゃないか、と思います。

ただそこで、歴史に対する見方の違いも出てきますね。世界史で言うと、「栄光の古代、暗黒の中世、ルネサンスを経て、近代市民社会の栄光」といった、V字の歴史観をお持ちの方がよくいらっしゃる。これを日本史にもってくると、戦前の皇国史観みたいに、輝ける古代、建武の中興、明治維新、と天皇が前面に押し出されたのが輝かしい時代で、それに対して、武士がはびこっていたのは暗黒の時代だ、といった大ざっぱなとらえ方があったわけです。

でも、人間って、昨日失敗したことを反省して今日に生かす。徐々にではあっても進歩していくのが人間で、だから古代より中世がまし、中世より近世がまし、……と右肩上がりに僕はとらえています。ただ、そこに大きな問題があるのは戦争です。いい時代、と言ってた近現代で、200万人も犠牲を出した太平洋戦争が起こってしまった。そのところが僕も、まだ答えが出ていないんですけれども。

——なるほど。歴史を「ただの過去の出来事」ということではなくて、現代との対比で見るところに、本郷先生の語りの面白さを感じました。自分の顔のように現代を相対化したり、発展に伴う課題——戦争もしたり、近代化の中の環境破壊とか、均一性の高まりの一方でのアイヌ差別とか、歴史の教員が考えていかななくてはならないポイントではないか、と改めて感じました。

## 中世のリアル——在地領主から武士の「知行」へ

——先生がおっしゃっている「分かりやすさ」というと、「在地領主」が具体的に分からないんですけど。

**本郷**：まず考えなくてはならないのは、当時は荒れ地がいっぱいあった、ということです。そこで耕作できるようにするには、石をどけて、木を切ったりしないといけない。木を切るだけならいいけど、根が張ってる、そういう切り株を抜くのは大変な作業なんですね。人間の力ではどうにもならない。そこで牛や馬を使うわけです。そういう形で土地をひらいたのが「**開発領主**」です。

ところが、当時の大原則は“公地公民”なんです、律令制の。それに反するから、どうするかと言うと、今の県庁にあたる国衙とかかけ合って、取り分を決めるんです。例えば「5年だけは税金免除」とか「30年は税金は半分」とか交渉して特権をもっているのが**開発領主**です。そして後継者たちに特権を引き継がせる、その子孫たちが「**在地領主**」であるわけです。

ところが、在地領主にとって怖いのは、国衙がことあるごとに収公しよう、と土地を奪いにやってくる。それから、周りの在地領主同士の争いもある。当時は警察権力みたいなものはありませんから、強いもん勝ち、勝ったもん勝ち。そうになると、自分の生命、財産、土地は自分で守らないといけない。“**自力救済**”これが、正に当時のキーワードです。そこで武装する。こうして、在地領主は武士になっていくわけです。

——その、根っこを掘るのが大変だ、とか、国衙との具体的なやり取りは教科書に載ってないですね。ひじょうに参考になりました。

ところで、源頼朝は、そういう武士たちの要望に応えたわけですよ。「本領安堵」を約束し、さらに地頭に任命して「段別五升の兵糧米」（日記『玉葉』）を朝廷に認めさせる。それを『玉葉』の作者九条兼実が「凡そ言語の及ぶ所に非ず」と非難するんだと思うんですけど、どこが貴族の怒りにつながるんでしょうか。

**本郷**：先ほど、国衝が土地を奪いにやってくる、と言いましたが、仕方がないから、在地領主は貴族に寄進するわけです。そこからまた、もっと上の貴族や皇族に寄進される。領家、本家ですね。そこで在地領主は下司、つまり現地の荘官になる。これも「知行」なんです。「一円知行」でなくて、一部でも所有権があれば、これは知行なんです。

では、九条兼実の非難のポイントはどこかと言うと、『玉葉』のなかの「惣じて以て」です。つまり、在地領主が自分でその土地をおさえて、京都に税金を持ってこなくなることを怖れているんです。そこを子どもたちに教えてあげれば、よく分かるんじゃないかなあ。

さらに言うと、「この本は僕のです」「そのスマホは君のです」という、現代で言えば当たり前の所有権が確立していなかったんだ、ということ。ごく簡単に言ってしまうと、**中世という時代は、権力が微弱で所有権を保証できなかった。**さっき言った“自力救済”がキーワードになるわけです。——先生、その中世の中でも、徐々に武士の「取り分」が増えていくわけですよ。それは、地域ごとに違うわけですか。

**本郷**：いや、もう地域どころじゃなくて、一か所一か所、土地ごと、荘園ごとに全部違うんです。その場所のルールに従ってください、というのが大原則なんですよ。

——それでも典型例があった方が、こちらも教えやすいし、生徒も分かりやすいですよ。一番最初の「一両は今いくら？」の話と同じで。

**本郷**：一例として挙げられるのは、承久の乱の後の新補率法ですね。現地で各々の取り分の取り決めはあるけれども、地頭の取り分の最低ラインとして幕府が定めたわけです。さっきの「分かりやすさ」でいうと、ほくの試算によれば、新補率法での地頭の取り分は200町の土地の地頭だとすると、年収3000万円になります。その計算が合っているかどうか分かりませんが。

## 歴史学とは——地侍、長篠の戦い、本能寺の変

——先生、武士の取り分が増えていく一方、農

民も強くなって行って、例えば惣村が起こす土一揆の勢いに、武士たちも手出しできない、なんて記録がありますよね。その土一揆、どうなっちゃうんですか。

**本郷**：これは、面白いデータがあります。応仁の乱などで、足軽が目されるでしょう。あの足軽が暴れている時期には、土一揆は起きないんですね。そこから考えると、「戦国時代に土一揆がなぜ起こらなくなるのか」という問いに対する答えは、「一揆のリーダー格の地侍層が大名の家臣になっていくから」ということだと思います。

つまり足軽＝地侍＝一揆のリーダー。秀吉のおとつあんみたいなのは正にそれ。織田家の家臣の末端に所属もし、農村では惣村のリーダー、つまり農民でもある。そういった人たちに、戦国大名は、農村から離れて城下町に移住して家臣となるか、農民として農村に残るか、さあおまえはどっちを選ぶのかと迫る。ざっくり言うとそういうことなんじゃないでしょうか。

——最近、長篠の戦いで「鉄砲の三段撃ちはなかった」といった説が話題になりましたが。

**本郷**：こういう話は、横丁のご隠居の豆知識で、面白いし必要なんですけど、違う切り口でないと、学問にはなかなかならない。

鉄砲隊という、兵種別編制を考えてみましょう。例えば僕が大名の家臣だとすると、北条氏でも武田氏でも、こうなります。おまえはこれだけの土地をもっているから、騎馬武者何人、鉄砲何丁、槍は何本もってこい、と命令されるわけです。それで例えば10人行ったとして、槍持ってる人、鉄砲持ってる人、刀だけの人をバラバラにすることがあり得るだろうか、ということなんです。ごほうびは、その家でもらうもので、戦ってごほうびをもらえなかったら行かない。そのごほうびの基準を考えていくのが歴史学の考え方で、「鉄砲の三段撃ちはあったのかなかったのか」と聞かれたら「まああぶなかったでしょうね」でおしまいになってしまう。それでは深まらない。

鉄砲の火薬というのは、木炭と硫黄と硝石、この三つがないと作れないんですが、硝石は日本で

は生産されない。輸入に頼らざるを得ない。そうすると港をおさえることと、商人とうまく商売すること、これをしないと鉄砲をうまく使えない。こういう時に戦国大名のどんな面が見えてくるか、こういう話だったら歴史学の話になるわけです。——「本能寺の変の真相」はどうですか。

**本郷**：それは永遠にわからないんじゃないでしょうか。現代だって、「どうして起こったのか」説明できない事件がいっぱいあります。では、どうやったら歴史的分析に近づけるか。

明智光秀のような「どこの馬の骨かもわからない人」を登用するのは織田信長だけ、というところがポイントだと思います。日本の社会は、生まれや育ちを大切に、世襲もあちこちで見られますよね。だけど、信長はそうじゃなくて、才能を重視した。当時の世界の、どこに才能を重視して人事をやった国があったか……と考えていくと、少し学問の匂いがしてくるでしょう。

## オンライン講義で大量失業？

——今日のお話で、「歴史研究者はもっと勇気をもって語ろう」というメッセージが熱く伝わりました。

**本郷**：やっぱり、研究者がもう少し歩み寄る姿勢をもたないと。教育というものをナメてますよね。僕らは。いま、リモート授業をやってますけど、あれ、すごく怖いと思います。

いきつく所までいっちゃうと、例えばマイケル=サンデルさんみたいに、頭は切れるわ、カッコいいわ、話はうまいわ、そんな先生の授業が聞けるなら、大学はいらなくなっちゃいますよね。第一人者と言われる人たちを5人か10人雇えば、今の大学教員はみんな失業する可能性がある、それに気づいていない。

だから、そういうことに対抗して、**対面式の授業**でどれだけのことができるか、って考えないと。

## かりに史料がなくても語っていいこう

——歴史を教えていて、授業でピンポイントの必要にマッチした史料がなかなかない、と感じて

しまいます。「分かりやすく」伝えようとする、史料の裏づけのない説明になってしまいます。

**本郷**：確かに、そうそう都合のいい史料はありませんね。私は、高校生レベルで史料をもちだす必要があるのか、と思わないでもないです。

昔、柴田錬三郎さんという時代小説の大家が歴史研究者たちと話す機会があったそうです。そこで研究者たちから「貴方はいいですねえ想像で書けて。」と言われたら柴田さんは、「おまえらはいいよなあ。史料だけ読めば論文書けるんだから。」と言われたんですって。

確かに、少し勉強すれば、左に史料、右にノートを置いて、柴田さんが言われたことは誰でもできるんです。そうではなくて、どういう証拠を集めるとどんな結論が出せるか考える、想像する。そこが歴史研究者の腕の見せ所なんです。

小さな疑問を考えると、大きな話になるんです。僕がいまだにひっかかっていること。僕が「鎌倉時代の人は、『オレたちは日本人だ』とは思っていなかったと思う」と言ったら、ある方から「じゃ、なんで元寇の時に裏切り者が出なかったのか」と言われたんですね。

今のところ、日本対モンゴルと考えていたわけではなく、裏切りは卑怯だと思われていたのではないか、とか考えているんですけど、そういう時、別に史料を出さなくても、言説でつきつめていって矛盾なくクリアに説明できるんだったら、それで充分じゃないか、と僕は思っています。

——先生、よく「子どもたち」とおっしゃっています。そういう機会があるんですか。

**本郷**：ノーギャラでやっています。「次の世代に歴史の面白さがわかってもらえないと、歴史学は滅びてしまうんじゃないか」という危機感をすごく持っているんです。

そういうことに呼んでもらえるなら、どこにでも行きますよ。呼んで下さいね。